

マーガレット・アトウッドの“Wicked Tales” ——ミソジニーとエイジズムと「ぞっとするような笑い」——

戸 田 由紀子*

Margaret Atwood's "Wicked Tales":
Misogyny, Ageism, and the "Shocking Laughter"

Yukiko TODA

はじめに

マーガレット・アトウッド (Margaret Atwood, 1939-) の短編集 *Stone Mattress: Nine Wicked Tales* (2014) には9つの“wicked tales”が収められている。アトウッドはインタビューで、あえて“tale”と題したと述べている (309)。「朝食に何を食べたか」といった日常の報告 (“Nouvelle”) ではなく、不思議で、奇妙なことが起こるフェアリーテール (“Conte”) の物語世界を想起させたかったからだと説明する (CBC Extended Interview)。

ここでアトウッドが念頭に置いているフェアリーテールは、グリムやディズニー版などに見られる「家父長制が化石化されたフェアリーテール」(Reynolds 2) ではなく、女たちが糸を紡ぎながら語り継いできた生々しい人間の生の営みを捉えた物語である。その多くは、人間の成長、生と死、親子や男女の関係といった生の営みにまつわる普遍的なテーマが多い。人間は誕生し、そしていずれ老いて、死んでいく。生きるためにはものを食べ、排泄する。生き残るためには時には残酷なことをする。親殺し、子殺し、妻殺し、復讐。身体の一部を切断する生々しく、恐ろしい場面も多い。また、糞尿譚や卑猥な話も出てくる。例えば活字化される前の赤ずきんは、祖母の血と肉を文字通り食べることで祖母から知恵を引き継いだ赤ずきんが、用を達しに行くと言って狼から上手く逃れるという、女性の成長と世代交代の物語である (Zipes 21-23)。アトウッドの *Stone Mattress* においても、吸血鬼と間違えられてコミュニティから追放される病気の女性の物語、若者たちに焼き殺される老人たちの物語、遺産目当てに次々と夫を殺害する女の物語、快楽殺人の物語など、「老い」や「死」をテーマとした物語が生々しく展開する。

「老い」と「死」はこれまでもさまざまな英語圏文学で描かれてきた。その多くは、「老い」に伴う「孤独」や身体的・精神的衰えなど、ネガティブな要素が強調されてきた。シェイクスピア (William Shakespeare) の戯曲『リア王』(*King Lear*) では、老齢によって正

* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

常な判断力が欠如し、思考力が低下し、理性を失い、本質を見抜くことができなくなるリア王の悲劇が描かれている。その悲劇を自身が作ったということさえ理解することができないリア王に、悲哀と「絶望」を感じずにはいられない。カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) の小説 *The Buried Giant* では、「愛は死を相殺できるのか」というイシグロが探求し続けるテーマが展開されているが、ここでも死ぬときは結局一人であり、いかなる愛や絆もそれを変えることはできない。カナダの短編では、アリス・マンロー (Alice Munro) の “The Bear Came Over the Mountain” がまず想起される。『アウェイ・フロム・ハー：君を想う』 (*Away from Her*) というタイトルで2006年に映画化されたこの短編は、アルツハイマーを患う妻を老人ホームに入れざるを得なくなった夫が、自分が誰だかわからなくなった妻が老人ホームの他の男性と親しくなっていく様子を黙って見守ることしかできない切ない物語である。

もちろん「老い」や「死」がいつも悲劇的に描かれてきたわけではない。例えばその一つに、ミュリエル・スパーク (Muriel Spark) の *Memento Mori* があげられる。デーヴィッド・ロッジ (David Lodge) は、*Memento Mori* が「老齢に伴うさまざまな身体的、精神的苦悩について描いているにもかかわらず、気のめいるような憂鬱なものではまったくなく、すばらしく面白い、爽快な作品である」 (Lodge 6) と評価している。ロッジも指摘するように、*Memento Mori* では、身体的には不自由であるにもかかわらず周りの人や外の世界に独特の影響を与え続ける老人たちの悲劇的な側面と喜劇的な側面との両方が展開されている (Lodge 15)。

アトウッドの *Stone Mattress* の短編も同様に、「老い」や「死」の悲劇的な側面だけではなく、喜劇的な側面も強調し、身体的には衰えても、精神的には衰えることのない老人たちの姿をコミカルに描き出している。しかし *Stone Mattress* で展開する「笑い」の特徴は、“darkly funny stories” (*Literary Review*), “darkly funny tales” (*Vogue*) と評されているように、その極めてダークな「笑い」にある。ダークと評されるのは、これらの短編が「復讐」という重いテーマを用いて、タブー視されてきた年配の人々に対する差別を指すエイジズムと女性蔑視や嫌悪を指すミソジニーをサティリカルに暴くからだと考えられる。

アトウッドは本作品のインタビューで、「老い」について描くということは、「復讐」という魅力的なテーマを展開できるということでもあると述べている。長く生きてみると、「人は皆誰もが心底殺したいと思うような人が少なくとも一人はいるはずだ」と述べ、だからこそ、「復讐」のテーマが展開できるのだと説明する (CBC Extended Interview)。その発言通り、*Stone Mattress* の “Alphinland”, “Revenant”, “Dark Lady”, “The Dead Hand Loves You” および “Stone Mattress” の5編は、70歳以上の高齢女性たちの復讐劇である。高齢女性はエイジズムとミソジニーの二重の差別を受ける。“Torching the Dusties” に登場する Tobias は、女性が男性より長生きする理由について次のように述べている。

According to Tobias, women hang around longer because they're less capable of indignation and better at being humiliated, for what is old age but one long string of indignities? (285)

ここで Tobias は、女性が男性より長生きするのは、「侮辱されることに慣れている」 (285) からだと指摘する。男は歳を取るまで屈辱的な待遇を受けることが少ないため、高齢者に

向けられる差別に耐えられないから早く死ぬのだと説明する。このTobiasの指摘は、女性蔑視が公然と受け入れられている社会の現状を示している。女性は男性と異なり、女だからという理由で蔑視され、嫌悪される社会に生まれてくるのだ。上に挙げた*Stone Mattress*の5つの短編の女性主人公たちは、皆、10代、20代の頃に付き合っていた男により、人生を大きく狂わされる。しかし彼女たちは、グリム版のフェアリーテールでお馴染みの、誰かに助けてもらうのをひたすら待つ「若くて美しい」女性主人公ではなく、自らのウィットと“devious mind”でもって、半世紀以上彼女たちを苦しめてきた相手に報復する。タイトルストーリー“*Stone Mattress*”で展開される主人公Vernaの「ぞっとするような笑い」は、古代から脈々と続いてきたミソジニーへの抵抗とそこからの「解放」の表明だと言える。本論ではこれまで議論されてきたミソジニーの定義を踏まえた上で、アトウッドの*Stone Mattress*が、ミソジニーへの抵抗とそこからの解放を描いたリベンジ物語集であることを上で挙げた5つの短編を通して示したい。

ミソジニー

“Alphinland”, “Revenant”, “Dark Lady”, “The Dead Hand Loves You”, “The Stone Mattress”はいずれも典型的なミソジニー男をサティリカルに批判する物語である。ミソジニーはギリシャ語の*misein* (“to hate”)と*gynē* (“woman”)から由来し(*Merriam-Webster Dictionary*), 女性に対する偏見と憎悪及びそれらを示す言動や行為のことを指す。文字通り訳すと「女性嫌悪」(“women hating”)である。*OED (Oxford English Dictionary)*によると、1620年には“Misgenysts” (“a woman-hater”)として、1656年には“Misogynie”として既に用いられたことが確認されているが、この概念が広く認知されるようになったのは、1974年に出版されたアンドレア・ドウオーキンの著書*Women Hating: A Radical Look at Sexuality* (1974)の影響が大きい。本書においてドウオーキンは、社会に蔓延する「女嫌い」が、人々の文化的世界観に深く根ざしていると指摘する。例えば、ミソジニーと男性優位は、ペローやグリム版のフェアリーテールによって子供たちに刷り込まれるという。「眠れる森の美女」や「白雪姫」では、無力で受動的な女性は「良い女」、力を持った女性は「悪い女」、男は子供を見殺しにしても常に「良い」王や父として描かれおり、男性優位とミソジニーが暗示されていると述べている。ドウオーキンは、そうしたミソジニーが、女性に対する様々な精神的、肉体的暴力の要因となっていると主張する。

イヴ・セジウィック (Eve Kosofsky Sedgwick) の提供したホモソーシャル、ホモフォビア、ミソジニーからなる理論を援用した上野千鶴子は、ミソジニーを「男が男であるために(劣等な)女でないことを証明するための(女を他者化する)機制」と定義する。上野はミソジニーが男と女とでは「非対称的に働く」(上野 12)と指摘し、男性にとっては「女性蔑視」、そしてその「女性蔑視」を内包する女性にとっては「自己嫌悪」といった二つの側面によって維持されていると説明する(上野 12)。

2010年代に入ると、ミソジニーという言葉が日常的に広く用いられるようになる。2012年には当時オーストラリアの首相であったジュリア・ギラード (Julia Gillard) が、野党党首の彼女に対する不当な性差別と女性蔑視に国会で抗議し、それが「ミソジニー・スピーチ」としてネット上で拡散し、話題となった。ヒラリー・クリントンの大統領選挙

の敗北もアメリカに深く根ざしたミソジニーに原因があったと指摘され、また2020年3月5日にエリザベス・ウォーレン（Elizabeth Warren）上院議員がアメリカ大統領選の民主党候補者を目指す戦いを終え、70代の白人男性バーニー・サンダース（Bernard “Bernie” Sanders）とジョー・バイデン（Joe Biden）のみが民主党候補者として残ったこともミソジニーが原因だと指摘されている（Boston Herald Editorial Staff, Ferris）。つい最近では、米国の次期ファーストレディーとなるジル・バイデン博士が「博士」という敬称を用いていることを侮辱した記事が、国際的にも影響力のある『ウォール・ストリート・ジャーナル』（The Wall Street Journal）によって公開され、物議を醸した。女性が挙げた成果を疑い、冷笑するこの記事は極めてミソジニスティックであるとミシェル・オバマやヒラリー・クリントンを始め、多くの人がメディアやSNSを通して批判の声を上げた。

2017年にはミソジニーのメカニズムをさらに探求し、論じたケイト・マン（Kate Manne）による *Down Girl: the Logic of Misogyny* が出版され、そのタイムリー性と明解な論証が話題となった。従来、ミソジニーは男の女に対する普遍的な敵意や憎悪と一般化されてきたが、すべての女性に敵意が向けられるのではなく、「特定の種類の女性」に限られることから、ミソジニーとは「女性が服従するよう監視および強要し、男性による支配を支持する家父長制社会秩序の中で機能するシステム」（Manne 33）だとマンは定義する。ミソジニーは、家父長的規範を強化する女性に報酬を与え、その社会規範や社会的期待に沿わない女性を抑圧し、罰する「社会的システム」だとマンは主張するのである。

これまでの議論が示すように、ミソジニーは厄介な概念である。上野は家父長制の社会秩序を強化する女性に焦点を当て、その秩序に従わない女性たちに作用する差別については深く論じていない。一方、上野とは逆にマンは、家父長制の秩序を脅かす女性に焦点を当て、その社会秩序や価値観を内包する女性たちについては特に深掘りしていない。一見、家父長制の秩序に従順か否かで女性が二つのグループに分かれているように映るかもしれないが、決してそうではない。男性支配を支持する女性であっても、その女性が社会的成功を遂げるやいなや、自分たちの社会的地位と権威が脅かされたと感じる男たちや、その価値観が根づいた社会から攻撃される。また、マンの言う男性支配と女性の服従を強化するための監視と取り締まりは、抵抗する女性だけではなく、全ての女性に働く。アトウッドの *Stone Mattress* は、このようなミソジニーのメカニズムを具体的に浮き彫りにする。まずはその中で、同じ出来事をめぐって3人の異なる人物から語られる三連作から見ていきたい。

“Alphinland”, “Revenant”, “Dark Lady”

“Alphinland”, “Revenant”, “Dark Lady” の舞台は1960年代トロント。「リバーボート」という朗読会や演奏会が開催される喫茶店に出入りしていた男女の三角関係を描いた3連作である。浮気された女性（Constance）、浮気をした男（Gavin）、そして浮気相手（Marjoree）のその後の人生がそれぞれの短編で展開されている。

三連作の最初の短編“Alphinland”の語り手であるConstanceは、若かりし頃のBF Gavinに裏切られたことを50年以上経っても引き摺っている。当時ConstanceとGavinは共に詩人になることを目指していたが、Gavinが執筆活動に専念できるよう、Constanceは通っていた大学まで辞め、サブカル雑誌に“Alphinland”というファンタジー物語を連載しながら、

フライドチキン店でも働き、Gavinを経済的に支えていた。しかしGavinはConstanceに感謝するどころか、女が男に尽くすことこそ「本物の愛の証」(24)だと信じて疑わない。女性の従属を強いるGavinはConstanceを繰り返し侮辱する。例えば、他の男たちと一緒に becoming Constance のファンタジー小説 *Alphinland* を貶す。Gavinと同様に作家として収入を得られていない男たちも、Constanceが自分たちより能力があることが許せない。そのため、一緒になって作品の質を貶めることで、自分たちの優位性をお互い確認し合い、またそれをConstanceに示すのである。

Gavinが50年以上Constanceの才能と成功に嫉妬し続けてきたことは、その後のGavinの言動から読み取れる。例えば、Gavinを訪問する大学院生Naveenaが、Gavinの詩についてではなく、Constanceの *Alphinland* について質問する場面からもそれは明らかである。

“Sorry,” he says. “I can’t help you. I’ve never read any of that crap.” False: he has read it. Much of it. It’s only confirmed his opinion. Not only was Constance a bad poet, back when she was trying to be one, but she’s a terrible prose writer as well. *Alphinland*: the title says it all. *Aphidland* would be even more accurate. (72-73)

ここでGavin「ごみ屑のような」Constanceの作品を読んだことはないと言っているが、実は密かに読んできたことが明かされる。タイトルは『アルフィンランド』(*Alphinland*)ではなく『アブラムシの世界』(*Aphidland*)の方がふさわしいなどと低レベルの負け惜しみをGavinが言っていることから、彼が未だにConstanceを貶めることで自身の優位性を主張しようとしていることがわかる。Gavinと決別後、有名ファンタジー作家となったConstanceは、マンの言う家父長制の社会秩序に沿わない、罰せられるべき女なのだ。しかし若い妻の介護を必要となっている今のGavinには、以前のように彼の「優位性」を認めてくれる男性同士の絆を築くことはできない。Constanceの才能と成功を妬んでいるもののそれを認めたくないGavinの衰れな様子をこの場面はサティリカルに捉えている。

ここで注目すべきは、GavinのミソジニーをConstance自身が完全に内包していたことである。当時Constanceは、Gavinに代替可能な「モノ」としてみられることを批判するどころか、むしろ歓迎していた。

Even to be the object of one of Gavin’s ironic or grimly satirical remarks—to the effect that her hypnotic ass was a much more significant part of Constance than her frankly forgettable poetry, for instance—was obscurely thrilling to her. She was also accorded the privilege of appearing in Gavin’s poems. Not by name, of course: female objects of desire were addressed in poems as “Lady” then, or else as “my truelove,” in a gesture to chivalry and folk songs—but it was enormously seductive for Constance to read Gavin’s more erotic poems and know that every time he wrote *Lady*—or, even better, “my truelove”—it meant her. “My Lady Reclines on a Pillow,” “My Lady’s First Morning Coffee,” “My Lady Licks My Plate” were heartwarming, but “My Lady Bends Over” was her favourite. Whenever she felt that Gavin was being terse with her, she would get out the poem and reread it. (emphasis added, 20-21)

ConstanceはGavinの作品の題材になることを「特権」と考え、それを「与えられた」ことを密かに喜んでいて(21)。「我が貴婦人、枕にもたれかけろ」、「我が貴婦人の朝1杯目のコーヒー」、「我が貴婦人、我が輩の皿をなめる」、「我が貴婦人、前に屈む」といったGavinが書いた詩の抜粋は、男性は見る主体、女性は見られる客体、男性の能動性と女性の受動性をサティリカルに強調している。この“Lady”は固有名詞ですら登場しない代替可能な女性として登場する。青い瞳に金髪という外見の特徴から、Constanceはこの“Lady”が自分を指していると理解するが、皮肉にもConstanceがGavinの浮気に気づくのも、その“Lady”の特徴が、黒髪の筋肉質な女性の描写に変わったためである。まさにGavinにとってこの“Lady”は唯一無二の存在ではなく、代替可能な「対象物」に過ぎないのだ。Constanceが何を考え、どのような内容の詩を書いているかよりも、彼女の「魅惑的なヒップ」(21)の方がGavinに重要視されることに、Constance自身が「なんとなくわくわく」(21)感じるようになっていく。Gavinに邪険に扱われる度にその詩を取り出しては読み返していることから、Constanceが「モノ」として評価されることを受け入れているだけではなく、「モノ」として描かれることでしか自己価値を見出すことができなくなっていることが理解できる。上野の言葉を借りれば、Constanceは、「欲望される自分の性的客体の記号に欲情する」(上野、朝日カルチャーセンター) ようになっていくのだ。

Constanceはその内、Gavinに侮辱されることさえ喜ぶようになる。

Gavin had always taken a certain pleasure in humiliating Constance in public, with the sardonic, ironic remarks that were one of his poetic specialties: it was a form of compliment, she felt, since it made her the focus of his attention. (27)

Gavinは、「持ち前の皮肉っぽい嘲るような詩的表現でもってコンスタンスの自尊心を人前で傷つけることに、いつも特定の喜びを感じて」(25) いる。当時のConstanceはそれを「自分に注目してくれている一種の賛辞」だと考えるようになっていく。そして「人前で」女を侮辱し、周囲の人(社会)に自分の優位性を主張する男と、「全力で尽くすことは当たり前」(25) だと疑わないConstanceは、上野の言う男性側の「女性蔑視」と女性側の「自己嫌悪」といった男と女とで「非対称的に働く」(上野 12) ミソジニーを表している。

Constanceが身を削ってGavinに尽くしていたにもかかわらず、Gavinは他の女性と関係を持つ。ConstanceはGavinの浮気現場に鉢合わせしてしまい、その後二人は破局する。Constanceは半世紀経った物語現在においても、Gavinに裏切られたことがトラウマとなっており、夫となったEwanの浮気を察しながらも、強く追及できないでいる。

She was always afraid to push that question before, the question of the affair. She wasn't an idiot, she knew what he was doing, though not who with: she could smell it on him. But she was terrified that Ewan might leave her the way Gavin had. She couldn't have survived that. (38-39)

Gavinの時のように関係が破綻するのを恐れ、ついに夫が生きている間に問いたすことができない。夫が亡くなってからも、「本当に私があなたの特別な女？ ずっと私だけ？

あの時、浮気してたの？」(35)、「浮気してた?」,「本当のことを言って! もう何も失うものはないじゃない, 死んでるんだから」(37), と夫の亡霊に何度も問いかけている。

何も後ろめたいことをしていないConstanceが自分の夫に「怖くて聞いitすことができない」理由を、イヴ・K・セジウィックのホモソーシャル論に当てはめると次のように説明することができる。異性愛によって維持される父権社会においては、男は男に認められることによって男になり、女は男によって認められることで存在価値と居場所を見出す。女は男に選ばれるために、他の女たちとは常にライバル関係に置かれている。GavinがConstanceではなく、他の女を選んだということは、社会への参入資格を失うことであり、自己存在の完全否定を意味する。ConstanceがいくらGavinに卑下されても存在を否定されたと感じないのは、それが「ホモソーシャルな社会に割り当てられた『女性の指定席』を甘受」(上野朝日カルチャーセンター)することに繋がるからだと考えられる。

3編目“Dark Lady”では、Gavinの浮気相手Marjorie (Jorrie) もその後ずっとGavinとの出来事を引きずって、前に進めないでいる様子が、Jorrieの双子Martin (Tin)によって語られる。Constanceは、Jorrieを「ボアコンストラクター」のように獲物を狙う力強い女性として記憶しているが、双子のTinを通して描写されるJorrieは、一人では何もできない情緒不安定な女性である。社会にリジェクトされ、Tinと暮らすJorrieは、毎朝新聞の死亡者追悼欄を見ては、そこに掲載されている人たちの葬儀に参列するといった病んだ日々を送っている。Tinに直接打ち明けることはないが、ConstanceとGavinのことをJorrieが今でも強く意識していることにTinは気づいている。

JorrieとConstanceはGavinの葬儀で再開する。Tinは二人の対決が繰り広げられると思っている。読者もTin同様、浮気された女と浮気した女の一騎討ちを期待する。実際これまでもConstanceは、Alphinlandの中で既にJorrieに報復している。

So every day at twelve noon sharp, Marjorie is stung by a hundred emerald and indigo bees. Their stings are like white-hot needles combined with red-hot chili sauce, and the pain is beyond excruciating. (30)

Constanceの空想・創造世界であるAlphinlandは、父権社会の手の届かない場所であり、Constanceはそこで様々な問題を処理することで正気を維持している。Jorrieへの復讐もこの架空世界の中で行ってきた。100匹の蜂にJorrieを刺させ、「熱を持った白い針と真っ赤な激辛チリソースに刺されたような耐え難い痛み」(30)をあれからずっと毎日与え続けてきたのだ。現実世界でJorrieと再開するConstanceが、Jorrieに飛びかかるに違いないと読者が待ち構えるのも当然である。

しかしTinや読者の期待に反し、二人は争うどころか和解する。Gavinが二人それぞれについていた嘘が葬儀で暴露されるからだ。GavinはJorrieに「誘惑された」(102)のでもなく、脅されてもいなかった。逆にJorrieの方がGavinに「使い済みのコンドームのように人生の下水溝に投げ捨てられた」(102)被害者だったのだ。真実を知ったConstanceは、Jorrieを蜂の巣の刑から「解放」(122)する。そしてConstanceとJorrieは長年お互いに苦しんできたことを共有し、和解する。

JorrieとConstanceがお互い泣きながら抱擁するのを傍で見ていたTinは困惑する。Jorrie

がConstanceと取っ組み合いになっても割って入れるよう待ち構えていたTinには、まったく予想できなかった展開となったからだ。

Is this a hug? Thinks Tin. Are they embracing, or wrestling? Is there a crisis? How can he help? What sort of female weirdness is going on?

He feels stupid. Has he understood nothing about Jorrie, all these decades? Does she have other layers, other powers? Dimensions he never suspected? (123)

二人が「抱擁しているのか取っ組み合っているのか」(123)すら状況を把握できないでいるTinは、目の前で繰り広げられている「女性の奇異さ」(123)を理解できない。Jorrieのことは、「内臓まで見通せるほど」(83)理解していたはずなのに、「この何十年間、実は何も理解していなかったのだろうか？」(123)と困惑する。ここでTinと同じようにJorrieとConstanceの復讐の矛先がお互いに向けられるであろうと期待した読者もその期待を裏切られることで、ミソジニーの構図が改めて浮き彫りになる。二人の復讐は本来の罪人Gavinに向けられ、ConstanceもJorrieも男ではなく、女に認められることでミソジニーの呪縛から解放されるのだ。

“The Dead Hand Loves You”

それでは次に“The Dead Hand Loves You”において、ミソジニーがどのように描かれ、男女間の復讐劇がどのように展開し、女たちがミソジニーの呪縛からどのように解放されるのかを見ていきたい。

この物語の主人公でもあり、語り手でもあるJackは、三連作の“Revenant”に登場するGavinと同様、ミソジニストでもあり、作家でもある。Jackは大衆ファンタジー作家として成功する前、三人のハウスメイト(Rod, Jaffrey, Irena)と暮らしていた。家賃を滞納していたJackは、本を出版し、その印税で返済すると三人に公言する。またその後の印税も四人で均等に配分することを約束する。IrenaがJackの身の回りの世話をしてくれたことに加え、Irenaの存在がインスピレーションを与えてくれたおかげで、無事Jackの作品は完成し、出版される。インスピレーションと言っても、Jackの性幻想を綴った「干からびた手についての陳腐でつまらないホラー物語」(214)であり、Irenaの身体が、性的対象として客体化/「モノ化」されていることが強調されている。

Jackが自分を性的欲求の吐口にしか見ていないことに気づいたIrenaは、Jackと別れる。その後Jackのホラー小説は大ヒットし、映画化もされる。IrenaはJackとの約束通り、印税が四当分され、三人の元ルームメイトに行き渡るよう弁護士に手配してもらう。晩年に達したJackは、自分の印税を横取りし続けた三人への長年の恨みを晴らすために、元ルームメイトたちを順番に殺害することを企てる。

しかし、最初にJackが会いに行くRodからは彼が末期癌を患っていること、そして死んだらRodの印税はIrenaが引き継ぐことになっていると知らされる。またIrenaの二番目の夫であるJaffreyからも、彼の分の印税もIrenaのものになることが離婚時に取り決められたことを知らされる。ここでJackのIrenaへの恨みは絶頂に達する。Jackは彼の印税を横

取りしてきた「鬼婆」(217)を殺害するためにIrenaをレストランに呼び寄せる。

しかし、ここでも予想外の展開となる。Jackの殺害計画は、Jackの意志とは無関係に、崩れていく。Irenaは、お金が欲しかったのではなく、ただJackと何らかの形で繋がっていたのだと打ち明ける。それはIrenaの別れた夫JaffreyがJackに伝えたことでもあったせいか、Jackは意に反してIrenaを口説き始めてしまうのだ。

“You were my inspiration,” Jack finds himself saying. Jack, you shameless cornball, he admonishes himself; but it seems he wants to give her pleasure. How did that happen? He needs to cut to the chase, toss her off a balcony, heave her down some stairs. (230)

ベランダから放り投げたり、階段から突き落としたりするつもりだったのに、Irenaを口説き始めている自分を何て「頓馬なんだ」と叱責しながらも、そのような自分を止められないのだ。そして一体何が起きているのか理解できないまま、JackはIrenaにプロポーズしてしまう。

この意外な展開は、この物語がJackの復讐譚ではなく、半世紀以上かけて入念に練られたIrenaの復讐劇だったのではないかといった読みを可能にする。Irenaは、印税を横取りされ続けたJackがいずれ取り返しに来るに違いないと確信していたのかもしれない。Jackを自分の元へおびき寄せるためだけに、JaffreyとRodと結婚し、離婚し、彼らの印税が自分のものになるよう策略したのかもしれない。Irenaが昔と変わらず今もJackを愛していること、また、印税でJackと繋がっていたかったことを別れた夫Jaffreyに計画的に伝えていたのかもしれない。JaffreyがいずれJackに話すかもしれないと見越していたのかもしれない。久しぶりの再会でIrenaが見せた涙も入念に練られた演技なのかもしれない。Irenaは最初から印税でJackの手綱を引き、最終的にIrenaにプロポーズさせるつもりだったかもしれない。

実際、Irenaは、Jackが考えるような、男にとって都合の良い「受動的」な女性ではない。好きでいるにもかかわらずJackと分かれたのは、客体視され続けることに対する拒絶表明である。自分の元に再びJackをおびき寄せることができるのであれば、JackがIrenaに強い憎悪や殺意を抱くことになったとしても問題ではない。なぜなら、再会した時のシナリオもIrenaは完璧に準備しているからだ。

Irenaは、若い頃とは異なり、歳を重ね、知恵もついた。Irenaは、Jackにとって都合の良い女で終わらない。IrenaはJackがいかに成功し、立派になったか、上手くJackの気持ちを持ち上げながら、Irenaにプロポーズするよう誘導している。例えば、印税を受け取った理由は、お金が欲しかったからではなく、Jackの「華やかな人生」(231)の陰で忘れ去られたくなかったからだと自分を卑下しながらJackの成功を讃えている。また二人の破局の原因を、Jackの奥底に潜んでいる「立派で、崇高な」(232)部分をIrenaに知られることをJackが恐れていたからだと分析してみせる。Jackは自分に「立派で、崇高な」側面が備わっていると信じてくれた女性はこれまでIrenaだけだと改めて振り返る。そしてこれはIrenaの「毘かもしれない」が、人生も残り僅か、「失敗について心配する時間が後どれだけ残っているというのか」(232)と考えるJackは、プロポーズに踏み切るのだ。限られた時間しか残っていない状況に追い込まれないとJackは「思い切った決断」ができないことまで読んでいたとすると、Irenaは実に先見の明に長けた女性である。

さらに、これがJackの考える通り Irenaの「罫」であるとするならば、Irenaの復讐劇の最終ゴールは、Jackとの結婚ではないかもしれない。半世紀以上前、自分を「モノ化」し、邪陰に扱ったJackをIrenaはまだ許していないのかもしれない。二人の夫RodとJaffreyの印税を手に入れたように、Jackの印税も全て自分の「モノ」にすることこそが、Irenaの報復の最終目的かもしれない。そのように解釈すると、“The Dead Hand Loves You”は、Irenaが父権社会を補強する女を演じながら、ミソジニーの呪縛から自らを解放する物語として読むことができるのだ。

“Stone Mattress”

“Stone Mattress”は老いても未だ衰えることの無いウィットでもって5人の男性を殺害する主人公Vernaの物語である。Vernaは4人目の夫を亡くした後、北極圏を巡るクルーズに参加する。しかし偶然そこで、未成年のVernaをレイプし、その後の彼女の人生を狂わせたBobと再会する。Vernaのことに気づいてすらいないBobにVernaは復讐を決意し、完全犯罪を計画、そして実行に移す。

物語は、「Vernaは初め誰も殺すつもりはなかった」(“At the outset Verna had not intended to kill anyone” 233) という一文から始まる。この最初の1文から既に、Vernaが誰かを殺すことになるということが読者に示されおり、どうして彼女が人を殺すことになるのか、そしてどのように殺すことになるのか、といったページターナー的物語構造になっている。しかしこの最初の一文は、これから殺害することになるBobを指しているものであり、それまでVernaが殺してきた人たちは含まれていない。Vernaが実は4人の夫を計画的に死に至らせた連続殺人犯だということがのちに明かされる。理学療法士である彼女は、遺産目当てに病气持ちの高齢男性との結婚を重ね、老後のための遺産を確保してきた。血管の詰まり易いものも好きなだけ食べ、心臓に負担のかかるスポーツなども思う存分楽しむことができた夫たちは、Vernaの策略に全く気づかないまま、幸せな人生を全うできたとVernaに感謝しながら死んでいく。

この4人の夫たちの殺害と、Bobの殺害は、その性質を全く異にする。Bobは、この短編集に登場する数々のミソジニー男の中で最も卑劣な男である。彼はまだ未成年だったVernaに酒を飲ませ、計画的にレイプした後、Vernaの性的放縦さを街中に知らせ、その後何もなかったかのように街に住み続け、幸せな家庭を築き、孫にまで恵まれ、何不自由なく悠々自適の人生を送る。一方レイプされた上に、不運にも妊娠したVernaは、特別な事情を抱えた女性たちが出産する施設に送られ、高校に通い続けることも街に住み続けることもできず、難産の末、子供を産めない身体になってしまう。産後、地元に戻ることもできなくなったVernaは、トロントへ行き、大学へ通うために身を売るはめになるのだ。

Why should she be the only one to have suffered for that night? She'd been stupid, granted, but Bob had been vicious. And he'd gone scot-free, without consequences or remorse, whereas her entire life had been distorted. The Verna of the day before had died, and a different Verna had solidified in her place: stunted, twisted, mangled. It was Bob who'd taught her that only the strong can win, that weakness should be mercilessly exploited. It was Bob

who'd turned her into —why not say the word? —a murderer. (underline added, 246)

なぜ「彼女だけがあの夜のことで苦しまなければならないのか」(246)。なぜBobだけが責任を負うことも、反省することもなく、罪を免れて生きていられるのか。「Vernaを殺人者にさせたのはBobなのだ」(246)とここで言っているのは、Vernaの4人の亡き夫たちのことであり、この段階ではBobのことは指していない。しかし極めて悪質な犯罪を清算するためにこれからBobを殺すことになるVernaを「本物」の殺人者に仕立て上げた張本人は皮肉にもBobなのである。

急遽企画された見学ツアー中、ストロマトライト断層の上で、ストロマトライト岩石に殴られてBobが殺されるというセッティングは象徴的である。ストロマトライトについて、ツアーを引率する若手科学者が得意げに説明する場面があるが、ストロマトライトは19億年前の化石であり、地球上初の保存された生物と考えられている。

“What is a stromatolite? He asks rhetorically, his eyes gleaming. The word comes from the Greek *stroma*, a mattress, coupled with the root word for *stone*. Stone mattress: a fossilized cushion, formed by layer upon layer of blue-green algae building up into a mound or dome. It was this very same blue-green algae that created the oxygen they are now breathing. (251)

ストロマトライトとは、藍藻（シアノバクテリア）の死骸や泥粒が、何十億年前から長い時間かけて堆積したことによって形成された層状の岩石のことである。まだ大気に酸素がなかったころ、シアノバクテリアが地球上の酸素を作り出した。よってシアノバクテリアが存在しなければ、人間は存在しなかったことになる。つまり人間も含めた動物誕生の環境整備をしたシアノバクテリアは、人間の生命そのものを誕生させている。作品内でVernaは、男女の愛の営みが繰り返される「マットレス」という言葉を強調しながら乗船している「もう一人のBob」を誘惑する場面があるが、「命を生み出す場所」という意味で実是的を射ている。また男女の営みには、お互いの同意の元で行うものと、相手に強要するレイプとがあるという意味においても、Vernaが自分をレイプしたBobを殺害する場としてストロマト断層を選んだことは的を射ている。女性のレイプという犯罪は、人類の始まりの頃から存在し続けており、レイプ被害にあった女性は、ストロマトライトを形成するシアノバクテリアの死骸や泥粒の数ほど存在する。無数の女性たちの苦しみと闇に葬られてきた。そして無数の加害者の男たちが罪を問われることなく死んでいった。Vernaが生命の誕生から堆積された化石を凶器としてBobを殴り殺す行為は、無数の女性たちの果たされることのなかった復讐を包括する象徴的行為だと言える。

まさか自分が殺されることになるとは想像もしないBobは、Vernaを口説き落とすために「スコッチ・ウィスキーのミニボトル6本」(255)を嬉しそうに忍ばせてきている。Vernaをレイプした時と同じ手口である。Vernaが自分の本名を名乗ったとき、BobはVernaのことを思い出したにもかかわらず、謝るところか、「なんか見覚えがあると思ったよ」(254)とあの時と同じようにあざ笑うだけであった。反省が一切見られないBobの態度に、Vernaは今度こそ容赦なくストロマトライト岩石を振りあげ、Bobを殴り殺す。

Bob殺害後にVernaがBobの遺体を見下ろす場面は、この短編集の中で最も衝撃的な場

面である。

Bob looks ridiculous, with his eyes open and fixed and his forehead mashed in and blood running down both sides of his face. “You’re a mess,” she says. He looks laughable, so she laughs. As she suspected, the front teeth are implants. (emphasis added, 255)

Bobの額は陥没し、顔の両側から血が流れ、両目は見開いたままじっと動かない。Vernaは怖気づくことなく、血まみれの屍体を見下ろしながら、Bobの「滑稽」な姿を「ひどい格好」といって笑い飛ばす(255)。

この状況でVernaが発する「笑い」をどのように説明することができるだろうか。「笑い」は通常、嬉しさ、楽しさ、愉快さといった陽気な感情を表現する行動の一つとして考えられている。しかし「笑い」は必ずしも肯定的な感情を表すものではない。テリー・イーグルトン(Terry Eagleton)が指摘するように、「笑い」はユーモア以外の様々な人間の心の動きや状態を表す。

But Laughter can also convey a range of emotional attitudes: joyous, sarcastic, sly, raucous, genial, wicked, derisive, dismissive, nervous, relieved, cynical, knowing, smug, lascivious, incredulous, embarrassed, hysterical, sympathetic, skittish, shocked, aggressive or sardonic, not to speak of purely ‘social’ laughter, which need not express the least amusement. In fact, most of the forms of laughter I have just listed have little or nothing to do with humour. Laughter may be a sign of high spirits rather than amusement. (Eagleton 2)

通常「笑い」は、イーグルトンがここで列挙している笑いを引き起こす様々な感情のどれか一つに綺麗に当てはまるわけではなく、複数の感情が混在している。上の場面のVernaの「笑い」には、Bobを殺害したことによる神経の高ぶり、自分がした行為に対して無意識に感じている動揺、無事殺害できたという安堵、長年の恨みをようやく晴らせたという爽快感と達成感が含まれている。街のスーパースターが成り下がった無様な姿に対する「冷笑」、当然の報いだという「嘲笑」なども含まれる。また、インプラントをしているという予想が的中したことに対する自己満足による笑いでもあり、剥き出しになったインプラントの滑稽さとグロテスクさに対する嘲笑でもある。

この場面が、極めて残酷でありながら、どこかコミカルな要素を感じられるのは、「グロテスクなもの、恐ろしいもの、そして平凡なもの」(Le Guin 2)が混在しているからだと考えられる。アーシュラ・K・ル＝グウィン(Ursula K. Le Guin)は、「喜劇と風刺にはグロテスクなもの、恐ろしいもの、そして平凡なものが常に入り混ざっている」(Le Guin 2)と説明する。北極圏のストロマトライト見学という珍しいツアー中に一人の男性が殺されるという恐ろしい非日常、陥没した頭蓋骨とインプラントがむき出しになった血まみれの死体のグロテスクさ、そしてインプラントという極めて平凡な日常を表すものが混在している。その無残なBobの姿を見下ろして「ひどい格好」といって笑い飛ばす常軌を逸したVernaの言動。この非日常と日常の混在から生じる衝撃と滑稽さが、許しがたい罪を犯したBobの愚かさを暴き出す。そしてこのVernaの「ぞっとするような笑い」は、ストロマ

トライト断層に堆積してきた無数の声なき女性たちを代弁する「笑い」でもある。また、ConstanceやJorrieやIrenaなどこの短編集に登場する他の被害女性たちの声や、彼女たちが報復後に浮かべる（であろう）「笑い」とも響き合っている。

Vernaが、自身のウィットでもって達成する完全犯罪は、ミソジニーとエイジズムへの抵抗という重要な意味を表す。女性たちは、ミソジニーに加え、歳をとると、思考力と外見の衰えに対する差別も受けるようになる。GavinはConstanceの文才のなさに加え、老いたConstanceは魔女のように「グロテスク」(68)だと彼女の外見も痛烈に批判するようになる。また“The Dead Hand Loves You”のJackも、若かりしIrenaを「聖女」(217)と呼び、歳を取ったIrenaを「鬼婆」(217)と呼んでいる。しかしこのような高齢女性に付された外見の衰えに加え、思考力のさらなる低下といったスティグマに反して、Vernaは若い時よりも研ぎ澄まされたウィットと“devious mind”でもって自分を長年苦しめてきた相手に報復する。そして完全犯罪を企む。

Vernaはまず凶器を隠蔽する。ストロマトライト岩石に付着したBobの血痕を洗い流し、それをストロマトライトのサンプルとして船に持ち帰ることをツアーガイドに提案する。そしてBobを殺した証拠は、サンプルとして船に持ち帰られ、サンプルテーブルに飾られる。その岩石/凶器は、乗船客の「手に取られ、観察され、議論され、たくさんの指紋がつけられる」(257)。よって証拠は、乗船者の「目の前」で消されるのだ。船に戻ってからもBobの不在がばれないよう、Vernaのウィットは細部にまで及ぶ。船の乗り降り状況を示す名前タグを、Bobの分まで赤から緑に、緑から赤に変えたり、Bobの部屋にあるものをこまめに動かしたり、Bobがタオルを使ったように床に放置したり、歯をみがいたように見せかけたり、Bobの服をクリーニングに出すなどして、Bobが船内で過ごした痕跡を残す。船にはBobという名の男性が複数乗船していることを確認し、それもBob殺害計画にうまく利用する。最終日の夜、Bobが星を見ながら船から転落したとしか考えられないように、クルーズの最後まで入念にBobの「幻影」を維持するのである(257)。

完全犯罪が実際達成されたかどうかは最後まで描かれていないが、おそらくVernaの推測通り、不要となったサンプル/凶器は船員によってクルーズの終了と共に海に捨てられ、凶器の隠蔽と共にVernaの完全犯罪は達成されることになるだろう。そしておそらくVernaも、“The Dead Hand Loves You”のIrenaや三連作のConstanceやJorrieと同じように、罪を犯した者が相応の罰を受け、過去が清算されるのを笑みを浮かべながらを見届けることになるだろう。

以上見てきたように、これら*Stone Mattress*の5つの短編では、若い時に受けた傷を半世紀以上抱え続けてきた70歳代の高齢女性たちに焦点が当てられている。加害者の男たちは、自分たちが犯した罪に気づいてすらいないが、被害者の女性が受けた傷は、その後半世紀以上経っても癒えることはない。「古い」と「復讐」をテーマとしたこれらの短編は、女性を蔑視する社会のメカニズムをサティリカルに暴くと同時に、ミソジニーを内包した女性たちの抵抗と解放を描き出す。“Stone Mattress”で展開される「ぞっとするような笑い」は、古代から脈々と続いてきたミソジニーとエイジズムへの抵抗とそこからの解放の表明である。Vernaの「ぞっとする笑い」は、この短編集に収録されている他の短編で被害を受けてきた女性たちの笑いと呼び合い、女性たちのエンパワーメントと連帯を生み出している。これらの短編が“wicked tales”と題されるのは、「古い」や「死」に加え、ミソジニー

とエイジズムというタブー視されているトピックを扱っているからだけではない。それは *Stone Mattress* が、家父長制の秩序に長年苦しめられてきた女性たちの抵抗と解放を描き出すことで、家父長制の秩序を維持し続けるミソジニーとエイジズムの仕組みを暴き、その社会秩序に戦いを挑む挑発的物語であるからなのだ。

参考文献

- Atwood, Margaret. *Stone Mattress: Nine Wicked Tales*. Virago, 2014.
- Dworkin, Andrea. *Women Hating: A Radical Look at Sexuality*. Plume, 1974.
- Eagleton, Terry. *Humour*. Yale UP, 2019.
- Epstein, Joseph. "Is There a Doctor in the White House? Not if You Need an M.D." *Wall Street Journal*, Dec. 11, 2020, www.wsj.com/articles/is-there-a-doctor-in-the-white-house-not-if-you-need-an-m-d-11607727380. Accessed Dec. 19, 2020.
- Ferris, Sarah. "Pelosi Cites 'Element of Misogyny' after Warren Drops Out." *POLITICO*, March 5, 2020, www.politico.com/news/2020/03/1051elizabeth-warren-nancy-pelosi-misogyny-122288. Accessed Aug. 10, 2020.
- Howells, Coral. "True Trash: Genre Fiction Revisited in Margaret Atwood's *Stone Mattress*, *The Heart Goes Last*, and *Hag-Seed*." *Contemporary Women's Writing*, 11.3 November 2017, pp. 297–315.
- Illing, Sean. "What We Get Wrong about Misogyny: Sexism and Misogyny Are Not the Same—and the Difference Matters." *Vox*. March 7, 2020, <https://www.vox.com/identities/2017/12/5/16705284/elizabeth-warren-loss-2020-sexism-misogyny-kate-manne>. Accessed July 20, 2020.
- Le Guin, Ursula K. "*Stone Mattress: Nine Tales* by Margaret Atwood." *The Financial Times Limited*, 12 September, 2014. *ProQuest*. 18 February, 2019.
- Boston Herald Editorial Staff. "Media Cries Misogyny as Voters Snub Elizabeth Warren." *Boston Herald*, March 9, 2020, www.bostonherald.com/2020/03/09/media-cries-misogyny-as-roters-snb-warren/. Accessed Aug. 10, 2020.
- Lodge, David. "Rereading: *Memento Mori* by Muriel Spark." *The Guardian*, June 5, 2010, www.theguardian.com/books/2010/jun/05/memento-mori-muriel-spark-novel. Accessed May 10, 2019.
- Manne, Kate. *Down Girl: The Logic of Misogyny*. Oxford University Press, 2017.
- Reynolds, Kendra. *The Feminist Architecture of Postmodern Anti-Tales: Space, Time and Bodies*. Routledge, 2020.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Columbia UP, 1985 (2015). 『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年。
- Shepherd, Katie and Kim Bellware. "As Critics Blast a 'Misogynistic' Op-ed on Jill Biden, a *Wall Street Journal* Editor Blames 'Cancel Culture.'" *The Washington Post*, Dec. 15, 2020, www.washingtonpost.com/nation/2020/12/14/dr-jill-biden-wsj-op-ed/. Accessed Dec. 19, 2020.
- Spark, Muriel. *Memento Mori*. New Directions, 2000.
- "*Stone Mattress: Nine Tales* Author Margaret Atwood" (Extended interview). *CBC News*. 8 September, 2014, cbc.ca/news/stone-mattress-nine-tales-author-margaret-atwood-extended-interview-1.2758886. Accessed March 10, 2019.
- Zipes, Jack. *Trials and Tribulations of Little Red Riding Hood*. Routledge, 1993.
- 上野千鶴子『女ざらい ニッポンのミソジニー』朝日新聞出版、2018（2010）年。
- 「女ざらい ニッポンのミソジニー」朝日カルチャーセンター、2020年9月14日。